

東京、2002年6月25日

モーリスへ、

日「義務感」は日本人意識の非公式な崇拜の対象であることは確かで、常に容赦なく、静かにそれが感じられる。

命令としての辛辣な明確さを決して持たず、我々が従うところの率直な必要不可欠な命令からは遠く離れ、むしろ個人的な直感によってせざるを得ないと感じるのだ。師や第三者が罵倒するわけでもなく、「義務感」は日本人達の意志の狭間に、社会から生え出るにまかせたものであり、それに日本人達は制約される。

「社会が文明によって獲得したものは個人の自由を大幅に制限してえられた」とシュテファン・ツヴァイクは語っている。日本がそれだ。全く文明化され、自らの島に原住民にだけで閉じこもっている。

ラテンそしてヨーロッパの思考の基本が、サド、デイドロ、シュテファン・ツヴァイクにいたるまで、ほとんど「ノー」と言わなければならない所にあるのに対して(私たちにとってはそれによって自由という言葉がもつべき響きを持って来る)、日本の思考の基本は「はいという義務」であるかのようだ。

要するに、カフカの作品中のK. が日本人であったなら、自分の罪を認めたことだろう。このように、この二つの文化の意図の相違からは、避けられない、尽きることのない無理解が生まれる。それが相互を引きつける理由でもある。「ノー」と言うことで、個人は協力的な道具には決してならないことを主張しているのだと僕は思う(社会は元来個人を協力的道具にしたいとの希望を持っている)。1943年に歯を仕分けしていた父親達のように、産業革命以降、連続しておぞましいことが起こってきたからだ。

日本人は屈折した自尊心を隠しもせず、自分は「我慢する」という。これは「自分で引受ける」というような意味だ。だからといって、どこまで自分以下でいること受け入れるのか。自分でないことを、はっきり言って非人間的になることを、そこに救いがあるとする彼らを見てどうして唾然としないでいられるだろうか。少なくともそれについては、大和の熱狂的信奉者の超自我こそ「現代」社会が産んだ最も恐ろしい亡霊だといえるだろう。

心から友情をこめて。

エリック

Copyright©Eric Van Hove - all rights reserved